

チベット仏教において、インド語の「般若智」(Skt. *prajñā*/Tib. *shes rab*)は女性の性を、その対概念となる「方便」(*upāya*/ *thabs*)は男性を指し、般若智と方便の両者の共同作業による密教の実践が行われる。しかし、女性が必ずしも常に智慧として体现されるわけではない。本発表では、古代チベット王「ソンツェンガムポの遺言書」として伝承された『カチェム・カクルマ』と『マニ・カンブム』を取り上げ、チベット仏教において、智慧と女性はどうのように描かれてきたのか、その諸相について考察する。

『カチェム・カクルマ』において、女性の性は智慧と欲望に二極化されて描かれる。『カチェム・カクルマ』は後伝期チベット仏教の復興のために招来されたインド人の学者アティシャ(982-1054)が観自在菩薩とラサ市に住む狂女の導きによる発見譚を記述する。この狂女は時折裸になったり、時折泣いたり、時折高揚したりする。ラサ市民にとって、この女性は狂女であるが、実は女尊青色ターラーの化身であり、ソンツェンガムポ王の中国妃の転生でもあると明かされる。アティシャはその女性が智慧虚空女(*jñānaḍākiṇī, ye shes mka' 'gro ma*)であると理解し、『カチェム・カクルマ』は智慧虚空女の授記であると記述されている。この記述は女性を智慧として特徴づけると言えるかもしれないが、女性を異様な行為をする気狂いとして登場させ、凡夫にはその行いが狂女にしか見えないことを示した後、凡夫の見方とは異なるアティシャの勝れた識別能力が示されているとも言えるだろう。王と二人の妃(中国妃とネパール妃)の結婚譚では女性の嫉妬心を描く。チベット人の起源として知られる岩魔女と猿菩薩の結婚譚では、岩魔女は欲望を体现し、男性の猿菩薩は、不浄観の修行によって、それを退けようとする。両者は観自在菩薩と女尊ターラーに承認され結婚するが、岩魔女と猿菩薩の子孫は善悪の二極化によって特徴づけられる。岩魔女の性質を受け継いだ子供たちは血肉を好み、否定的な性質を持つ一方、男性の猿菩薩の性質を受け継いだ子供たちは知的である。『マニ・カンブム』は岩魔女と猿菩薩の結婚譚を継承する。その点では、女性は三毒を体现するように描かれていると見える。しかし、その一方で、『マニ・カンブム』の教義的な特徴は「自心仏」(*rang sems sang rgyas*)と如来蔵思想である。その文脈では、女性は、如来蔵であり、仏性であり、法性であり、あるがままのあり方である。それが自分自身の中にあることに気づかせるのが大悲心観自在菩薩の意図を持つ師匠(ラマ)の役割である。母親と息子との出会いが大臣を介して行われる物語として例示される。「放浪している王子が大臣一人に出会ったとき、『王子だ』と認知され、連れ戻され、母親と再会したとき、息子と母親が互いに認知する」。自分自身の中にある法性は母親であり、その母親に、輪廻に彷徨う息子としての明知(*rig pa*)が出会い、両者が融合することで輪廻が反転されると説かる。『マニ・カンブム』では、明知が輪廻転生の行為者である。明知が輪廻するのは母親と出会わないからだと言えよう。

キーワード：「ソンツェンガムポ王の遺言書」、智慧と女性、母と息子